

明治・大正の千歳を支えた薪炭業

大谷 敏 三

千歳市総務部主幹

(市史編さん担当)

Key Word 薪炭 炭窯 焼き子 小学校 川船

はじめに

千歳市街から西方に約五キロのところに千歳川の支流内別川がある。わずかに二・五キロ程の清冽な流れの川である。水源では伏流してきた水が、毎分九十リットルほどが音をたてて湧水している。水質が良く、水量が多いことから千歳市民の飲料水として利用されている。千歳市の水道事業のため合流点近くに堰が造られ、サケの遡上を見ることができなくなった。

昭和三十八

(一九六三)年、

内別川下流右岸で二振りの蔵手刀が発見された。これを契機に早稲田大学の桜井清彦らによってなされた発掘調査では、八世紀



図-1 炭窯実測図 (角窯)

の東北地方の半の金属器をもなう二十八基の墓が発見された。副葬品に見られる金属製品は、蔵手刀のほか横刀、刀子、環など二十三点におよぶ。移入されたこれらの製品は、東北地方北部の末期古墳の副葬品との類似性が強い。

昭和四十年代後半この土地の所有者がこの川の流域にゴルフ場建設を計画したことから、千歳市教育委員会は五十年から三か年にわたって埋蔵文化財の分布調査を実施した。

この調査で、内別川から縄文早期からアイヌ文化期にいたる多くの遺跡が発見された。この調査結果にもとづき、昭和五十四年に流域を含む百四十六軒が国の史跡に指定され、内別川流域は保全されることになった。

調査では当初予想していない、苗別川流域から北信濃、ウサクマイ台地にいたる沢沿いや台地上から近代の多くの炭窯跡が発見された。

平地に炭窯、土取りしたと思われる窪みなどが残されていた。

発見された炭窯は角窯(図・一)と丸窯(図・二)の二つの形態があった。森林に覆われた広い調査地域の中で、調査は必ずしも十分なものでなかったが、それでも角窯四十三基、丸窯四基の計四十七基が確認された(註・一 図・三)。

沢に沿って幅二メートル程の林道が発見されたが、これは製炭材や薪炭の運



図-2 炭窯実測図 (丸窯)



図-3 内別川流域の炭窯の分布

搬のために造られたものであろう。それらの炭窯跡の数は、薪炭作業に従事した人々の存在を想起させるに充分なものであった。

一・江戸時代

仙台藩の玉虫忠義が勇払から千歳を通ったのは、安政四(一八五七)年の九月六日であり、その記録『入北記』(註・二)に、途中の今の植苗あたりに炭焼きが住んで、窯二か所ばかりがあったと記している。勇払勤番所や会所などの需要のためであったらしい。

千歳地方でも炭が焼かれていたかどうか不明であるが、千歳川会所使用の薪について、勇払場所支配人山田屋仁右衛門の「勇武津御場所諸願諸届留」に次の願書がある。

乍恐以書付奉願上候

一 薪 千二百石

内千間 ユウフツ会所並漁場焚用分

貳百間 千年川会所焚用分

右ハ明戌年焚用分アヘラ(筆者注「安平」)

並千年川山ニオイテ伐出シ申渡シ奉存候間何卒格別之以御慈悲願之通被仰付被成下度願上候以上

ユウフツ御場所

支配人

(文久元年)

西十一月

元三郎

ユウフツ

御詰会所

右のうち漁場焚用とあるのは、タルマエ沿岸(苦小牧錦岡)の鰯漁場の盛期でもあり、鰯を煮て、油と糟を採るための燃料が大部分であったろう。

千歳会所焚用の薪は千歳川山から伐り出されたようであるが、千歳川

山とは、会所に至近の山であつたろうから、現在の青葉公園や航空自衛隊千歳基地のあたりの山が考えられる。

二. 官林の開放

千歳で早くから木炭を消費していたことは想像されるが、記録としては、明治十四年明治天皇ご巡幸の際、用意した木炭があつた。

明治三十年、「北海道国有未開地処分法」により、開発に成功すれば土地取得は無償で、制限面積も農耕地で五十万坪（五百町）、牧畜地で二百五十万坪（八百三十三町）と大きく拡大された。しかも立ち木も無償付与だった（註・三）。

千歳の製炭のはじまりは定かでないが、明治三十年に御料林の造材が始まったと言われるから、造材の跡地に製炭の業者の入るのも明治三十年代の初期と考えられる。札幌という消費地に近く、千歳から木炭を運んでいっても価格が引き合うようになったのであろう。

この頃からドロノキを原料とするマツチの軸工場、明治三十年には小阪軸木製造工場、三十一年には寺尾軸木製造所、三十二年に扇榊軸木製造所などがママチ川周辺に相次いで建設されている。しかし、最盛期は明治三十四年で材料となるドロノキが伐りつくされると同時に三十九年閉鎖せざるをえなかった。

長都に入植した戸田甚吉の追憶記によると、明治三十四年、開拓の邪魔ものになっていた森林を、それまで切り倒し、ただ焼き捨てていたが、冬場の仕事にはじめて炭に焼いて札幌へ馬で運び、現金収入を得たという。

また、この年、近唐（現在の協和）に入植していた人々も、カシワの渋皮からタンニンエキスを採ったあとの木を炭に焼きはじめたという。

アウサリ（現在の駒里）でも、入植者たちは明治三十五年頃から、東京の桜組が早来にかシワの渋皮からタンニンエキスを製造する製渋工場をつくつたが、渋皮を採ったあとのカシワを炭に焼いた（註・四）。製法も窯から焼いた木を出し、それに土をかけて炭にする消し炭に似た方法であつた。

明治三十六年の新保鉄蔵の「西田土蔵止宿泊」の中に、木炭が取り扱われ、一俵十四銭と記されている。

明治三十六年、祝梅に入植した荒川浅治も開拓のかたわらその後炭を焼きはじめた。

河野常吉の聞書「胆振国」（註・五）によれば、千歳の製炭業は明治時代、その盛況が過ぎ、原木が減少してくると、山林の解除があり、どうやら業が継続できた。以前には作業を簡単にするため大木を丸切りにしてそのまま、かま入れにして焼いたが、これは炭量の歩どまりが悪く不経済であつた。樹木が少なくなつてからは、丸太を小割にして焼くように変わった。

「千歳外三ヶ村沿革史」（註・六）によると、明治三十九年の木炭生産額は百二十万貫であつた。

この年の炭窯の数は不明であるが、千歳外三村の明治四十一年度における村費賦課額中「炭窯割」の予算は、炭窯数二百基、一基につき一円二十銭の計二百四十円となつている。明治四十年前後には二百基前後の炭窯が経営されていたと見られる。

千歳においての製炭の最盛期は第一次世界大戦頃である。大正三年、道は炭窯補助規定をつくり、木炭改良講習会を開くなど農家の副業として製炭を奨励している。千歳では、第一回講習会を大正三年十一月二日から十二月十八日まで、翌年にはアウサリで十一月七日から十二月四日

まで行われている。窯も改良され、櫛崎式というのが多く造られた。大正の初め頃の木炭一俵の値段は、山元でナラ炭が十五銭程度にしかならなかったが、大戦が終わった頃には

一万坪ヨリ炭凡二万貫（即二千俵）ヲ出スベシ、炭一俵ニ対スル立木代凡五十銭余ニテ、二千俵ニ対シ金千円ナリ。大抵二竈ヲ築キ一ヶ年ニ焚キ尽スベシ、山元ニテ櫛一俵一円十銭、イタヤー一俵一円五十銭に売ルベシ、平均一円廿銭トセハ、総炭代二千四百円ニテ、立木千円ヲ差引、千四百円ノ収入ナリ

との状況であった（註・七）。

三、「山神」の碑

長都神社境内に現存する「山神」の碑は、明治三十八年十一月十五日となっている。これは、長都地区に入っていた専業製炭者、その焼き子などの関係者が作業の安全を祈って建てたものである。この碑の台石には次の二十四人の名が刻まれ、当時の盛業を偲ばせる（写真・一）。

正面

発起人 天野兵太郎 大川原春吉 藤原仁太良 青田甚吉 白石勝太良

新築請負 小田部喜一郎

向って右側

又村右五郎 小林市次郎 佐藤豊太 村上万吉

工藤惣吉 岩本米造 藤ノ亀太郎 長谷川与次郎



白石得乃助

向って左側

大野慶三郎 大川原一美 浜本岩次 宮本松太郎

矢羽場善助 朝里太郎 山口新八 大橋大七 川岸米造

神出杉雄が父寛から聞いた話によれば、明治四十四年に長都に入植した祖父は当初、田も畑もない鬱蒼とした雑木林で、それを切り開いて、まず住む小屋を建て、粘土で窯を造って炭を焼いていたという（註・八）。

四、泉沢

明治四十五年三月、札幌の岡田幸三がママチ一〇〇九番地の官林払い下げをうけ、同年七月十七日、これを千歳村の渡部察蔵に譲った。この山を渡部栄蔵が大正三年に相続した。

写真-1 「山神」の碑

また、この頃と思われる時、厚真村の永田仙松が、その奥隣地の一〇五〇番地、一〇八番地の山林を東京などの所有者から買い造林した。「胆振国」によると、永田の造林は約五年間で、これを渡部栄蔵と札幌の林覚蔵が買い、残木を製炭業者に切売りしたという。ママチ一〇五・一〇〇六番地は他に売られた。

ママチ一〇七〇番地の山林は、現在の泉沢向陽台である。戦後、学校林として一部を植林したウソツプサルン沢に、大正七年測量の五万分の一地形図では沢の左岸に二軒、下の両岸に一軒ずつ、計六軒の製炭者の家と思われる記号がある。

当時このあたりから、後に北海道の教育長となった二本木實が通学していた。二本木の父は、本州から、製炭業のために来たらしく、その後、苦小牧の三百万坪の方に移動した。

昭和六年五月、江別町は、ママチ川上流のママチ一〇〇七番地、一〇八番地の山林を佐久間庸一から、ママチ一〇〇九番地の山林を渡部栄蔵から買収した。これは江別町が薪炭の供給を図つてのものであった。

江別町はママチ川の町有林において、近藤伝蔵を現場主任として製炭の直営を図つた。窯二基を築き、同年五月十七日、製炭清式（きよしき）を行つて焼きはじめたが、事業はうまく進まなかった。

江別町は直営をやめ、薪炭材の欠乏から衰えはじめていた千歳などの製炭業者に、翌十三年からは年々二十〇四十鈔の立木を売買契約し、代金は木炭で納めさせた。江別町有林では宮本宮七、荒川作次、北岡吉太郎、戸田重義などが製炭を行つた。

ここを千歳市が江別市から買収したのは、昭和四十五年九月であった。荒川作次、戸田重義などの人々が製炭を続けたが、泉沢開発が進んで製炭を中止した（註・九）。

五、学田

現在の北栄、北斗の沢を中心に学田があった。学田は、明治十三・十四年に開拓使がおこなつた施策で、自治体に山林や海産干し場などを与え、土地や海産干場はその貸賃、山林は薪炭材の払い下げ代などで学校の経営に図らせた。昭和十一年作製の「千歳村有林施業要領」に、旧北海少年院裏を含み国道三十六号線の両側に広がる百六十九・三七鈔の山林図があり「学田団地」と記されている（註・十 図・四）。

学田の恵庭寄り隣地、千歳村七一八番地の原野約百九十四町歩は、明治四十年、小樽区入船町八〇番地丹原金五郎から、横浜市尾上町三丁目二七番地の田沼太右衛門が買いつけている。河野常吉の「胆振国」によると、丹原は払い下げ代金を支払えずに売つたとある。田沼は枕木として立木を売り、後、大正十年九月、その残木をも売つた。買い手は更に、立木のまま売り、それを買つた者が製炭を行つた。

「胆振国」によれば、大正の初めころには、山林所有者は林地の立木を一万坪くらいに切り売りするようになった。一万坪が約五百〇六百元、

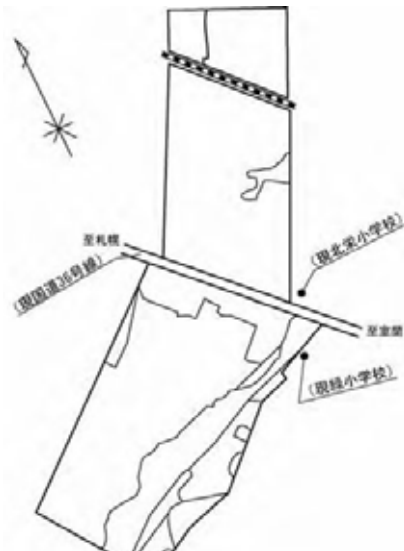


図-4 学田団地

昭和53年広報ちとせ10月号「市史つれづれ」より

木の値が次第に
あがり最高で千
円以上にもなつ
た。製炭業は千
歳村の経済に活
気を与えていた
が、原木がなく
なると專業者の
多くは他の適地
を求めて転出し

ていった。

大正八年七月調整の「千歳村ノ状勢」などによれば、大正初め頃の木炭の生産高、価格（表・一）と、製炭窯、戸数、人口は次のとおりであり（表・二）、大正七年には三百十基の炭窯があった。

この頃、大正八、九年に、中川種次郎も、学田の約四十町歩に、窯を七、八基ほどもって製炭を経営した。苫小牧の三百万坪が開放された大正六年頃、北栄の村有林である学田の立木が払い下げられ、北岡吉太郎は大正十二年九月から同十月まで、ここに窯四基を築いて製炭に従事した。ほか

に熊次郎の兄である竹内弥四郎も入っていた。この学田は全くの原始林であった。

学田の次の谷（ポロコツ）の方に木滑の山があったが、明治三十年頃に伐られたらしく、この二次林でも炭が焼かれていた。北岡吉太郎は、つぎに大正十五年（昭和元年）から昭和三年まで、この学田と国道の間にあった美唄の伊藤冬治の山林三十六町歩を炭に焼いた。

学田の立木は、幾度か薪炭材として払い下げられたが、昭和十一

	大正 4 年	大正 5 年	大正 6 年
生産高	2,574,000 貫	2,637,000 貫	2,718,000 貫
価格	90,090 円	118,655 円	271,800 円

表-1 木炭の生産高と価格

	大正 4 年			大正 5 年			大正 6 年			大正 7 年		
	窯	戸	人	窯	戸	人	窯	戸	人	窯	戸	人
専業	76	68	204	91	71	222	159	131	422	159	130	
兼業	210	193	521	202	194	573	143	137	381	151	137	
計	286	261	725	293	265	795	302	268	803	310	267	

表-2 木炭の窯数、戸数、人口の推移

年以後何故か学田の文字は見られない。二十一年には、単なる地番字千歳七四六、管理方法は『共同薪炭備林』とある。

学田の増減については、昭和十七年に旧北海少年設立に際して一部が寄贈された。戦後の昭和二十二年から二十四年に一部が自作農創設特別措置法により国に買収された。ついで昭和二十八年暮、それまで一年間貸付していた旧学田の一部は保安隊方面地方建設部に買収されている（註・十一）。

六、炭焼きと学校

製炭者の悩みの一つは、市街から離れた山中に住むことが多く、日常の買い物をはじめ病氣治療、児童の通学などであった。ユーマイ沢において、製炭の最盛期に、双子の新生児をつぎつぎに死なせ、その子らの母親がその後を追って病死するという痛ましい出来事があった。

ユーマイ沢の水源から百餘程行った盆地を、千歳さけます孵化場から恵庭市街に通ずるいわゆる「ふ化場道路」が通じている。この道の西側に、この地区の製炭に入った炭焼きの子弟のための教育施設が設けられた。

この学校で学んだ竹内熊次郎やその他の人々の記憶によると、炭焼きの戸数は四十、五十戸で、家々は五町から十町ほど離れて暮らしていた。昭憲皇太后が亡くなった頃（大正三年）で、千歳小学校の分教場の施設で室が一つ、先生は千歳小学校校籍の三十五、三十六歳の杉本叶という人であった。

生徒は三十人くらいで学校はそこに五、六年あった。学校には釣瓶井戸があり、太い木の校門が終戦の頃まで残っていた。学校のそばには内山という雑貨店があった（図・五）。

この運動場に千歳小学校から児童が遠足していったこともある。こ

の部落の神社は学校の裏の西の丘にあった。祭りの時は角力があり、一力という角力名で若い頃の初代市長山崎友吉もここで相撲をとったものである(註・十二)。この学校がいつ設置されたかについては、明治三十四年近唐簡易教育所の堀常衛門校長の息子昌治によって



図-5 ふ化場道路略図
平成2年広報ちとせ10月号「シリーズ道」より

もたらされた次の文書によって、大正三年一月と判明した。

念証

大正三年二月十九日附ニテ千歳村蘭越教授所ヨリ幣館ニ掛図納入スベク御用有之候モ同教授所ハ本年一月ヨリ新設ニシテ未タ学校印出来無之候為納入御用命ノ証トシテ千歳郡近唐教育所印ヲ押捺致候モ代金其他一切ノ切ノ取引要件ニ関シテハ近唐教育所並管轄千歳戸長役場ニ決シテ御迷惑相懸ケ不申候ニ付後日ノ為念証一札差入レ仍テ如件

大正三年二月二十四日

東京都浅草区千束町三丁目

百二十七番地

合弁会社 徳道館店員

円道 良雄

堀常衛門殿

この念書は、東京の徳道館という名の店が、近唐教育所の堀校長宛に書いたもので、大正三年二月十九日に蘭越教授所に掛図を納入したが、同年一月の新設校のため学校印がなく、代印として近唐教育所の学校印を借用した。だが、代金その他取引要件に関して近唐教育所に決して迷惑をかけないとするものであった(註・十三)。

この千歳尋常小学校分教場「蘭越教授所」は、竹内熊次郎の記憶によると大正六年前後で廃校になったようである。

大正十年頃、熊次郎は内別川上流のふじやの山七十町歩の立木を買って製炭した。

大正十二年頃、現在の飛行場の所にも七十町歩ほどの山を持ち、そこに炭窯を六く七基築いて仕事を始めようとして召集された。あとを兄が引き受けたが、ほとんど炭を焼かぬうちに、海軍に買収された。

七. 三百万坪

新千歳空港から南西に、支笏湖に近い苫小牧営林署の丸山地区に至る間の山林を「三百万坪」、略して「三百万」とも言われてきた。

三百万坪は即ち一万町歩(二万^歩)の広さである。この地区の官林の千歳側が開放されたのは大正初期らしく、大谷由三郎や宮本宮七が指定入札者となり払い下げを受けた。

千歳の農家が造材の山子になって冬には三百万やサンナシ沢で稼いだ。中村敬次郎は「着陸場ができたころ、まだ六歳だったが、私の家のそばだったのでよく覚えてます。私の家は炭焼きでした」とサンナシの沢の周辺で木炭を焼いていたことを述べている(註・十四)。

北岡吉太郎は恵庭寄りの山で炭を焼いていたが、木がなくなると大正七年から三百万に移動した。そこは美沢川の支流と思われる沢で、地区

のほぼ中央に位置し、狐沢と呼ばれていた。現在の泉沢最上流に近い地点で、枕木をとった残山であった。

そこには雑貨店が一軒あった。取引きは千歳市街で行われた。大正七年測量の五万分の一地形図に、当時の炭焼きの家らしい七軒の記号がある。三百万の木を切りつくすと、大正九年吉太郎は、その東の工藤牧場の立木を買って窯を移し、製品は早来を經由して鉄道で札幌へ出荷した。

千歳側の三百万の木は、大正七年から大正十年の間に炭に焼きつくされた。専業の炭焼きは、一部はこの年開放になった苦小牧側の三百万に移動したとみられる。この三百万は、農業振興策の一環として自作農創設の目的で入植させたものである。一戸平均四万五千坪が与えられた。

ここに入植したのは、美々の共有地から来た人が多かった。物資は千歳から移入され、信用購買組合をつくっていた。用材や木炭も千歳との取引きであった。

大正十二年に特別教育規定の適応をうけて「三百万坪特別教授所」が設置された。一時は二十数戸にもなつて賑やかであったが、数年で木を伐りつくすと人々は去つた。

当時は、検査も受けず出荷していたが、品質の低下、包装の不備、量目の不足などを招いていた。大正十三年十二月、胆振、日高の薪炭業者が集まり、胆振日高木炭同業者組合を設立し、十四年九月から木炭の検査事業を開始した。昭和三年、千歳郡を同組合検査区に編入し、木炭検査事業を行い、品質の改良、包装、量目の統一をはかつてきた。昭和五年、北海道木炭同業組合聯合会が結成し、同六月一日をもって検査業務を移管している（註・十四）。

昭和十三年五月頃、木炭は需要の増大とともに前年に比し約四割価格が騰貴した。政府は道庁を指導し価格を抑え、引き下げる方針をとつた。

同年八月、中央物価委員会は木炭の価格統制を行い、主要消費地別に価格を決めたが、それでも前年より三割高になり、生産地から遠い地方に出まわらない恐れがあった。そこで木炭配給調整会を結成、配給の円滑化を図つた。

八、戦中

昭和十一年、村には四百六十一・四四鈔の村有林があった（表・三）。戦時中、薪炭用材の不足に悩む製炭業者のために、しばしば村有林の立木払い下げが行われた。昭和十四年六月二十日、千歳字アウサリの村

	名 称	面 積	備 考
村 有 林	学 田	169.37ha	
	アウサリ	106.46ha	
	マ マ チ	185.64ha	
計		461.47ha	

表-3 村有林の名称と面積

有林内、十九・五鈔の闊葉樹立木（幼齡樹）八百四十八立方呎六九五を村は大蔵長蔵と売買契約した。伐採及び処理の期限は翌十五年五月三十一日迄であったが、千歳海軍航空隊の設置に伴う施設工事などのため人夫不足になり、十五年五月十二日、長蔵は同年七月三十一日迄延期するようお願いしている。木炭増産について同年、石狩支庁は次のとおり通達した。

石林第七九六号
昭和十五年八月九日

石狩支庁長

町村林製炭原木伐採二関スル件

本月八日石支第九〇号ヲ以テ通知致候昭和十五年度
斫伐箇所二対シテハ木炭増産上速ニ売払処分相成度

追而売払ハ從來ノ縁故製炭者ニ特売相成様致度申添候

村役場は八月二十日、從來の焼き子である水本清次、大田十太郎、大蔵進に本件に關しての出頭を求め、また九月六日、阿宇砂里第一農事実行組合長松本賢治と同第二農事実行組合長武田菊五郎にも出頭を要請した。

同年十一月一日、両農事実行組合とアウサリ団地の村有林内四十四町二段一畝の立木闊葉樹(幼齡樹)一万千六百七十二石二斗の売買契約をした。製炭のためこの地域に窯を築くことを認めた。

同時に同様の条件で、千歳村字コムカラ一四三一番地の村有林二町三段、立木闊葉樹(皆伐)千百三十五石五斗を、村はコムカラ部落聯合会長本田豊次郎と売買契約をした。

木材の原木はナラ、アサダ、カバ、イタヤ、サクラ、ヤチダモなどであった。

当時の村の木炭の採用市価は、黒炭樺一等四円二十三銭、二等四円、黒炭一等三円八十五銭、二等三円六十三銭、三等三円二十五銭、等外二円四十三銭であった。

昭和十四年十二月、農林省令「木炭配給統制規則」により、生産と消費の道府県を指定区分した。農林省告示に、北海道は生産地とされ、移出先として宮城、秋田、埼玉、東京、神奈川、新潟、富山、石川などの府県が指定された。

戦争のため鉱工業用、自動車用に木炭の消費が増え、政府はこれに対処するため昭和十五年度から、生産目標を決め、各道府県へ木炭・薪・ガス発生用薪の生産割当を行った。

昭和十五年七月、農林省令「薪炭材需給調整規則」が公布され、地方公

共団体、生産組合、農事実行組合その他の団体が、木炭生産用の薪炭材を取得しようとするときは、もし供給者との協議が不調であれば、地方長官が裁定し得ること、またさらに必要があれば薪炭林所有者に立木の譲渡その他を命令できるなどを規定した。

昭和十六年度から、移出木炭は全部政府買い上げ対象となり、十六年六月、札幌に農林省の木炭事務所が設置され、この買い上げ事務を取り扱った。

町有林の第一期施業計画を実施中であつた千歳町は、普通木炭およびガス発生用木炭の増産奨励に依じて、町有林の伐採地区と伐採量の拡大の必要があつた。第一期施業計画の改定予定の昭和二十年度を迎えるのに先立って、そのため、町有林ママチ団地の施業の変更を同年九月次の事由書を副えて申請した。

変更事由書

一、変更ヲ要スル事由

千歳町ニ於ケル民有林野面積約一萬二千町歩内天然生林地約八千町歩ヲ有シ木炭増産目標年額八十万四千貫ナルモ逐年減産ノ傾向ニアリテ甚タ遺憾トス

適々時局ニ鑑ミ御方針ニ基キ町有林ハ率先シテ原木ノ供出ニヨリ普通木炭並ニ瓦斯用木炭ノ増産其ノ範ヲ示スハ甚ダ機宜ヲ得タルモノナリ而シテ原木供出ニ関シ第一期施業計画中ニ之ヲ求ムルモ生産保続上敢テ文障ヲ来サズ只伐採地区及伐採量ノ変更ニヨリ目的達成ニ寄与セントス

二、伐採地区ノ選定

町有林中ママチ団地一八五六一一階八第四年度(昭和十四年度)以降第十年度(昭和二十一年度)ノ七年間ニ毎年伐採率五〇%施業ナルモ蓄積小ナ

ル丘陵ト大ナル沢面トヲ併セ毎年伐採スベキ計画ニシテ林利増進上甚ダ不利ナル方法ナルヲ以テ之ヲ地況林況並ニ施業上ヨリ考慮シ伐採地区ノ変更ヲナサントセリ

原案採積 三、六八九m³（五〇%伐採）

変更案伐積 五、八九七m³（主 伐）

三、伐採木選定ノ方針

本団地ハ檜、アサダ、カタスギヲ合シ本数並ビニ材質ハ全林ノ約四〇%ニシテ其ノ他ハカバ、イタヤ、サクラ、ヤチダモ等ニシテ矮林作業ニ適スル

故ニ矮林作業当リテ直径四cm以下ヲ残存シ第二次林ノ構成ヲ促シ夫シ以前ノモノヲ伐採セントスルモ町有全林ノ輪伐期ニハ影響大ナラズ

四、伐採林ノ措置

本団地ニ於ケル伐採予定ハ第四年度ヨリ（昭和十五年）始マルモノナリシガ不實行ナリシタメ昭和十七年度ニ於テ三ヶ年分ヲ伐採予定シ其ノ後八年次計画ニヨリ施行セントスルモノナリ

又伐採量三ヶ年分約五〇%ハ普通木炭ニ残り瓦斯用木炭原木トシテ供出セントスルモノニシテ残年分ハ普通木炭原木ニ供出シ木炭増産ニ寄与スルヲ適當トス

「木炭配給統制規則」は、十八年五月に廃止され、「物資統制令」により、「薪炭配給制規則」が公布され、木炭のほか普通薪、ガス薪も統制された。道は十九年八月、通牒「薪炭生産機構活動推進ニ関スル件」、および終戦間近の二十年七月の通牒「製炭実行組合ノ整備強化ニ関スル件」などにより、製炭実行組合を生産の母体とするよう改組し、一町村一組合に整備して指導督励に当たったが間もなく終戦となった。

十、焼き子

大正六年の記録では、薪炭の専業戸数は百三十一戸、兼業戸数は百三十七戸だった。兼業は農家の農閑期などにおける副業的自営によるものであった。

製炭業者は焼き子と呼ばれる人を雇っていた。

製炭業者が、炭焼きに用いる山、多くの場合は立木を購入し、その場に焼き子と呼ばれる炭焼きの職人が入り、炭窯、炭焼き小屋を作り、炭を焼いた。食糧、日用品にいたるまで製炭業者が仕込みを行い、生産した木炭は製炭業者に納め、賃金を貰っていた。

さらに、その山林で炭焼きが終わると、業者が準備した別の場所であつたため、薪炭が確保できる場所に炭窯を作るほうが効率的であつたためである（註・十六）。

十一、搬送

生産された薪炭は業者によつて集荷された。馬で千歳に運ばれ多くが千歳川の川船で江別に出荷された。

明治三十一年六月、石狩川漕運（株）が江別から千歳間の定期航路開設の試航を行う。

「千歳方面からの木炭の搬入は、三十年以降、川船が定期的に行きかうほど活発化する。例えば、四十四年の「江別村勧業統計」によると、千歳・漁方面から江別への木炭の搬入は、二十二万六千貫、追分・栗山方面からは十四万八千貫を搬入する。うち江別での消費高は、二十四万八千貫、残余は貨車で江別駅から小樽方向に送られ」とされる（註・

は裏街道となり衰微していった。
 鉄道が開通すると、札幌本道は目を追って往来者は少なくなり、千歳村

区域(市場)		種別	出廻量	単価	産出地
小樽	小樽区	黒炭	6,720,930 貫	67 銭	(安平)3,000,000 (千歳)362,860 (由仁)375,000
		白炭		—	(厚真)2,499,000 (沼貝)129,250 外
室蘭	室蘭区	黒炭	1,744,250 貫	65 銭	(苫小牧)624,000 (安平)500,000 (白老)442,550 (輪西外)195,700
	厚真伊達	黒炭	620,000 貫	30 銭	(厚真)自村輸出差引 450,000 (伊達)138,300 (壮瞥) 31,700

表-4 林産物(木炭)出廻実績(明治40年調『増補厚真町史』)

十七 表(四)。

また「江別からは砂糖、酒、反物、醤油、縄などの日用品が運ばれ、千歳方面からは木炭」が運ばれた(註・十八)。

大正十五年の北海道鉄道札幌線が開通したが、この鉄道の運賃は国鉄の二倍半と高く、しばらくは川船が輸送に利用された。

十二・まとめ

入植時には、木材は燃料と家屋建築用以外に利用の途がなく、耕地が作られる過程で森は次々に焼き払われた。開墾が目的であったから、巨木を伐採し、積み重ね焼却していった。

明治二十三年、「官有森林原野および産物処分規則」が設けられ、これは森林資源をもって事業にあたらうとするものに林産物の特売契約を認めたものだった。三井物産は、二十五年には十一万本の枕木を清国に輸出している(註・十九)。

その後、道内各地の鉄道の敷設、都市化に伴う建築材の需要がたかまり、枕木、角材、製材は年とともに産額を増加していった。

明治二十五年、室蘭・岩見沢間に北海道炭鉄

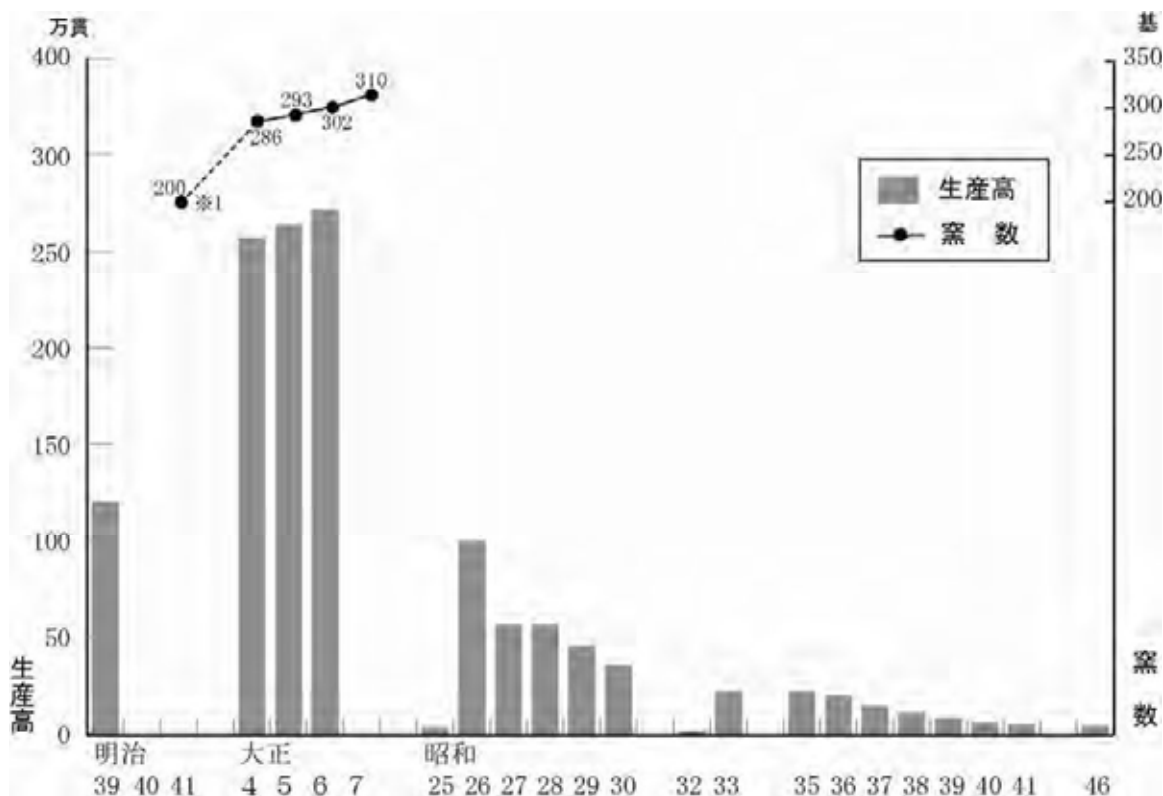


図-6 千歳の薪炭生産額と炭窯数

※1 千歳外三村村費賦課額(明治41年)「炭窯割」の予算から

当時、安平村は道内の「木炭需要の約四割を占め、本道木炭業者の首位でその一翼を担っていた」。明治四十四年六、七月室蘭線早来付近での連日の大雨で炭窯が損傷し、例年の過半に達せず札幌・小樽の木炭相場が二倍の価格に大暴騰した（註・二十）。

第一次世界大戦中の国内工業の興隆とともに札幌、小樽、江別などの人口の増加により家庭暖房用の需要が高まり、千歳の木炭の生産量が増加していた。江別、小樽方面の輸送が水運や鉄道が整備され、千歳との物流量が増加していた。大正四、六年にかけて木炭生産の最盛期を迎える（註・二十一 図・六）。

明治四十一年の千歳外三村の村費賦課額には炭窯割の項目があり、一基につき一円二十銭が賦課されている。薪炭業に携わる人は人口の十九割、税金は村税の二十八割を占め、薪炭の占める割合はきわめて高かった（註・二十二）。

大正六年には、専業炭焼き百三十一戸、兼業百三十七戸の合計二百六十八戸、窯数が三百二を数え、八百三名が従事している。木炭収入は二十七万八千八百円である。この頃、農家戸数は六百五十九戸、農家収入の五十九万三千二百七円と比較すると、農家一戸当たりの収入を上回っていることを示している（註・二十三）。

明治から大正にかけて、薪炭業は農業以外めぼしい産業のない千歳の主要な産業のひとつになった。

大正八年の千歳は、山林の面積は十四万八千四百四十三反三百十一歩で、村の面積の五十割強を占めている。このうち七千三百二十三反百八歩の民有地を除くと御用林などの官有林であった。

千歳において木炭産業が隆盛したのはこうした広大な森林が広がり、炭材としてナラ、カシワ、イタヤなどの広葉樹が豊富であったこと、官

有林の売り払い等による大量の薪炭材の入手が可能であったことがあげられる。

千歳における炭焼きは、第一次世界大戦や札幌、小樽の人口増などの社会変化を背景に生産量を飛躍的に増加させ、大正六年には、生産数量二百七十一万八千貫と道内有数の生産を見ている。しかし、資源の乱材から薪炭材の減少、枯渇が顕在化し、村にしばしば村有林の薪炭材の払い下げを陳情するようになる。薪炭材の減少が生産量の減少につながり、やがて産業としての役割も小さくなる。

その後、北海道はストーブが普及し、薪、石炭、石油へと燃料需要が変化し、木炭需要は急速に低下していく。

昭和四十六年を最後に、『要覧ちとせ』の統計から木炭の生産高は姿を消した。最終統計は昭和四十五年十二月末現在、一年間十四万三千四百キダ（三万七千四百二十四貫）だった（註・二十四）。

現在、千歳には炭窯は協和に塚辺穀所有の一基と幌加の明石一高所有の二基の計三基あるのみである。（文中敬称略）

追記 千歳市に炭焼きに関する多くの資料が残されていた。『増補千歳市史』を執筆した長見義三によって取材、収集されたものである。これらは『増補千歳市史』に掲載されることなく長く書庫に埋もれ、日の目を受けないとかなかった。今回、充分なものではないが何とか形にできたことを、『増補千歳市史』の編さんに携わったものとして安堵している。

註

註・一 西連寺健 昭和五十八（一九七八）年 「第四節 産業史」『苗別川流

域における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書Ⅰ 一一三～一一八頁

註・二 玉虫忠義 安政四（一八五七）年 『入北記』

註・三 柳沢文敬 平成十七（二〇〇五）年 「緑の北海道開拓」十六頁

註・四 明治三十五年五月、東京の桜組郷士会社が安平村早来に日本一の規模の製洪工場の建設に着手、翌三十六年八月、製皮用のタンニンエキス製造を開始した。その原料であるカシワの洪皮を、早来をはじめ、千歳、恵庭などから求め盛業をつづけた。千歳村ではアウサリ、コムカラなどから原料が集められた。桜組はまたアウサリ地区に牧場を開いた。日露戦争後タンニンエキスの需要が減少した。明治四十年四月、工場はそのまま日皮革株式会社が桜組みから引きつぎ、工場名を同社の早来製洪所と改称した。しかし、周辺に原料が尽きると早来の工場を閉鎖し、十勝国池田に工場を新設し移転、四十四年十一月製造を開始した。桜組牧場は、大正九年、室蘭の利根五郎兵衛がこれを買ひ、小分して売った。

註・五 河野常吉 大正十一（一九二二）年 聞書『胆振国』

註・六 千歳村 明治三十九（一九〇六）年 『千歳外三ヶ村沿革史』

註・七 更科源蔵 昭和四十四（一九六九）年八月 「木炭」『千歳市史』四七〇～四七三頁

註・八 神出杉雄 平成十（一九九八）年 「長都昔話―農村風景の一段面―」

『千歳を知る 二十周年記念誌』 四八～五五頁

註・九 長見義三 昭和五十七（一九八二）年十月 「ただいま―基―千歳市内

の炭がま―」千歳市広報N°・631号 市史つれづれ第二十二回

註・十 長見義三 昭和五十三（一九七八）年十月 「学田団地・千歳村教育

所を育てるために」千歳市広報N°・583号 市史つれづれ第六回

註・十一 註・十に同じ

註・十二 川越一雄 昭和六十三（一九八八）年 「第一特科団見学」『千歳を知る 十周年記念誌』 一二五～一二七頁

註・十三 千歳民報社 昭和五十四（一九七九）年六月二十五日 「幻の小学校やつと日の目」

註・十四 『歎振う村人の夢ここに舞う』 平成八（一九九六）年九月 三頁

註・十五 堀江敏夫 昭和五十（一九七五）年 「四 製炭事業」『苫小牧市史

―上巻―』一七七三～一七八五頁

註・十六 松本拓 平成十七（二〇〇〇）年三月 「物資移送器具の民族考古

学・岐阜県飛騨市宮川町の橇・車・背負梯子・背負籠から」『人類誌 周報二〇〇五・飛騨山峡の人類誌・遺跡資料の人類誌』三二～四六

頁 首都大学

註・十七 藤倉徹夫 平成十七（二〇〇五）年 「江別川は生活道路」『新江別

市史―本編―』 二二〇～二二二頁

註・十八 註・十七に同じ

註・十九 註・三に同じ

註・二十 厚真町 平成十（一九九八）年 「第二節 林業」『増補 厚真町史』

二二八～二三二頁

註・二十一 註・十七に同じ

註・二十二 千歳村 大正八（一九三三）年 『千歳村ノ状勢』

註・二十三 註・七に同じ

註・二十四 註・九に同じ

文献

千歳市史

増補千歳市史

樋口清之 平成五（一九九三）年 『木炭・ものと人間の文化史七―』